

識別番号 P 3
 研究課題 儒教文化圏におけるキリスト教の受容と霊性
 研究代表者 竹内 修一（キリスト教文化研究所）
 共同研究者 大橋容一郎（哲学科）、片山はるひ（神学科）、川中仁（神学科）、具正謨（神学科）、佐久間勤（神学科）高山貞美（神学科）、田中裕（哲学科）、増田祐志（神学科）、光延一郎（神学科）

Summary Summary
 How has Christianity been accepted and challenged in East Asia? In general, Confucianism has a great influence on the countries in this region. However, the relationship between Christianity and Confucianism has not been studied sufficiently. We try to investigate this question from various academic points of view, such as theology, philosophy, Christian literature, sociology, and history.

1. 本研究の目的及び背景

東アジア・極東アジアにおいて、キリスト教はどのように受容され、また反発・挑戦を受けてきたか—それを、神学、哲学、キリスト教文学、社会学、漢文学、東洋史など様々な専門の立場から多角的に取り上げながら、儒教あるいは漢字文化圏特有のキリスト教のあり方を探る。

文化と文化との出会いは、その地域的特性によって多様な形態を採る。東アジア文化圏において、これまで、キリスト教と仏教との関係については、さまざまな研究がなされてきた。しかし、儒教思想との関係については、十分考察されてきたとはいえない。そこで、中国、韓国（朝鮮）、台湾、日本の文化的共通基盤として儒教を捉え、それによって、新たなキリスト教理解、またキリスト教との対決に見られる諸特徴を研究する。

2. 研究の方法・内容と共同研究員の役割分担

各研究員は、それぞれの専門分野の方法論に基づきながら、以下のような三分野から研究を進め、総合的観点の構築を追求する。

研究分野①	《儒教思想とキリスト教思想の比較研究》
	● 「徳概念を鍵とする儒教とキリスト教の比較」(竹内)
研究分野②	《儒教思想のキリスト教受容への影響》
	● 「キリスト教受容における朝鮮儒教思想の影響」(具)
	● 「日本文学におけるキリスト教の受容」(片山)
	● 「明治・大正期における日本へのドイツ哲学の移入と、それに基づく日本の哲学思想、とりわけ認識論および倫理学の変遷」(大橋)
	● 「キリシタン時代の聖書受容」(佐久間)
研究分野③	《儒教文化圏におけるインカルチュレーションと宗教間対話の可能性》
	● 「キリスト教側からの諸宗教受容と対話の可能性」(増田)
	● 「東アジアにおける歴史認識と和解の問題——東アジアの平和にとってのキリスト教」(光延)

- 「親鸞の教えと宗教間対話」(高山)
- 「日本思想におけるキリスト教の受容と対話」(田中)
- 「日本におけるイグナチオ・デ・ロヨラの霊性の展開」(川中)

3. 研究の成果

①川中仁所員による「九鬼周造とキリスト教」

九鬼周造は、日本の思想界・哲学会において、にユニークな位置にある。彼は、どのようにキリスト教（特にカトリック）と出会い、その後の人生において、どのようにそれと関わっていったのだろうか。九鬼自身の魅力は、その哲学的論理性とともに、感性の深みともいべき日本的情感の裏づけにある。哲学における彼の根本的問題としては、時間論（時間と永遠）と偶然論（偶然性と必然性）を指摘できるだろう。一方、日本的感性・情感の豊かさは、文学に対する造詣とともに彼自身の生い立ちを指摘できるだろう。このような背景のもとに、有名な『いきの構造』は生まれた。九鬼は、友人の岩下壮一から多大な影響を受けた。それは哲学にとどまらず、キリスト教とりわけカトリックと出会うことになる。キリスト教に対して、彼は、共感とともに反発も持っていた。前者は、特に岩下という生身の人間をとおして、また後者は、当時のカトリシズムに対して生まれたものであった。

②田中裕所員による「西田幾多郎とキリスト教」

西田は、「道」をもって「体」となす、という。その体＝身体とは、のちに「歴史的体」あるいは「ロゴスの体」として、後期西田哲学で主題化された。「ロゴスの体」とは、「道をもって体をなす」という意味で道の受肉であり、哲学という学問的営為が、その「道＝ロゴス」の身体的活動を意味する。後期西田哲学では、特に、「個物」の立場が重視されるが、個物とは、歴史的体をもった人格であり、「道」そのものが、身体として歴史において活動することを意味する。西田は、『善の研究』において、禅宗や浄土真宗などの東アジアの霊性の伝統だけでなく、多くのキリスト教神秘主義者の言葉を縦横に引用しながら、純粹経験ないし自己の現象学における自覚の深まりを論じていた。親鸞とパウロ、道元とアウグスティヌスなど、仏教とキリスト教という、二つの異なる伝統を形成する地平が、西田自身の宗教経験の中で融合し、内的対話が遂行されていた。

③光延一郎所員による「現代人の終末不安へのキリスト教終末論の答え」

3・11という出来事は、私たちに、改めて真の希望へ向かう必要性を示唆してくれた。身体の隅々に血液が行き渡らなければ、私たちは、生きることができない。同様に、この社会に希望が行き渡らなければ、その社会は、真に生きた社会にはならない。「今、ここ」に与えられたいのちを恵みとして受け容れること——それは、私たちにとって、祈りの始まりでもある。それゆえ、今回のような出来事に対峙して、「なぜ神は、このようなことを許されたのか」とただ嘆くのではなく、その背後に恵みを見出すことが、いっそう求められる。「目を覚ましていなさい」(マコ 13: 32—37) ——これは、私たちに対する神の招きでもある。